都城市文化財調査報告書　第82集

鍋前第３遺跡

—県営中山間地域総合整備事業高崎地区に伴う発掘調査報告書—

２００７年３月

宮崎県都城市教育委員会

調査地点遠景（北西より）

序　文

本書は、「県営中山間地域総合整備事業高崎地区」に伴って、平成16年度に高崎町教育委員会が調査を実施した鍋前第３遺跡の発掘調査報告書です。

平成18年１月１日の市町村合併に伴い、引き続き新都城市として調査成果の整理を行ってまいりました。

都城市高崎地区では、100箇所を越える遺跡が見つかっています。その中で、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落遺跡は、上示野原遺跡があります。

本書の刊行を通じて、地域の文化財に対する理解と認識が深まって行くことを願うとともに、今回の成果が学術研究の発展に少しでも寄与できれば幸いです。

最後に、調査の実施に際しご理解とご協力をいただいた地区住民の皆様や北諸県農林振興局をはじめとする関係機関の方々、そして発掘作業から調査報告書作成にいたるまでご協力いただいたたくさんの皆様に対し、心より感謝申し上げます。

２００７年３月

都城市教育委員会

教育長　玉　利　　譲

例　言

1　本報告書は、平成16年度に宮崎県高崎町教育委員が実施した県営中山間地域総合整備事業高崎工区に係る鍋前第３遺跡の発掘調査報告書である。調査地は、宮崎県都城市高崎町大牟田1794－２他である。

2　調査は、宮崎県北諸県農林振興局の委託を受け、国庫補助事業として高崎町教育委員会が実施した。

3　平成16年度は、現場での発掘調査を行い、平成17年度と平成18年度に整理作業を実施した。

4　平成18年１月１日の市町村合併に伴い、高崎町教育委員会は都城市教育委員会となった。

調査組織は、次のとおりである。

平成16年度～平成17年12月

調査主体	高崎町教育委員会
教 育 長	髙野　浩之
事 務 局	高崎町教育委員会社会教育課
課　　長	今村　功
課長補佐	木下　章
調査担当	山嵜　薫

平成18年１月～平成19年３月

調査主体	都城市教育委員会
教 育 長	玉利　譲
教育部長	今村　昇
事 務 局	高崎生涯学習課
課　　長	今村　功
課長補佐	木下　章
調査担当	山嵜　薫

5　地形測量及び遺構実測は、民間業者へ委託した。

6　レベルは、海抜である。

7　調査によって得られた資料及び出土遺物については、高崎地区公民館内で保管している。

8　本書の作成は、山嵜が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
Ⅲ　鍋前第３遺跡の概要……3
Ⅳ　検出遺構
　１．　１号住居跡　……5
　２．　２号住居跡　……6
　３．　３号住居跡　……7
　４．　４号住居跡　……8
　５．　５号住居跡　……9
　６．　６号住居跡　……10
　７．　７号住居跡　……11
　８．　８号住居跡　……12
　９．　９号住居跡　……13
　10.　10号住居跡　……14
　11.　11号住居跡　……15
　12.　12号・13号住居跡　……16

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図　……3
第２図　遺構配置図　……4
第３図　１号住居跡実測図　……5
第４図　２号住居跡実測図　……6
第５図　３号住居跡実測図　……7
第６図　４号住居跡実測図　……8
第７図　５号住居跡実測図　……9
第８図　６号住居跡実測図　……10
第９図　７号住居跡実測図　……11
第10図　８号住居跡実測図　……12
第11図　９号住居跡実測図　……13
第12図　10号住居跡実測図　……14
第13図　11号住居跡実測図　……15
第14図　12号・13号住居跡実測図　……16

Ⅰ 調査に至る経緯

平成14年度に県営中山間地域総合整備事業が高崎地区（木下・鍋）で採択されたが、当該計画地域内には周知の遺跡があるため、平成15年度に県文化課による試掘調査が行われた。

その結果、地下遺構の残存が認められた範囲の埋蔵文化財の取り扱いについて、北諸県農林振興局と高崎町教育委員会による協議を重ね、鍋地区内の鍋前第３遺跡について平成16年度に発掘調査を行い、平成17～18年度で整理作業と報告書の刊行をすることになった。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

１．自然環境

都城市高崎地区は、宮崎県の南西部にあたり、霧島山麓から広がる都城盆地の北西部にある。東は大淀川、北は大淀川支流の岩瀬川に画されている。町内の地形は、全体的に都城盆地に向かって、北西から南東に標高を減じている。この傾斜に従って、町内の河川は、北西から南東に流れる。最も標高の高い地点は、北西部山田町との境界にあたる長尾山地で標高400mを越える。全体的には、標高300m程度の山地が占める。現在水田として利用されている平地は、およそ標高120m～160mの位置に広がる。地形区分では、山地が約30%、シラス台地が約30%と半数以上を占める。平地は、大淀川支流の高崎川と炭床川流域に僅かに広がる。

地区内は、四万十層群を基盤とし、その上に火山噴出物が厚く堆積している。その主なものは、始良カルデラ起源の入戸火砕流堆積物（シラス）、アカホヤ、御池降下軽石（御池ボラ）等がある。

２．歴史環境

高崎地区内の遺跡は、昭和63年に公表された数は63ケ所であった。しかし、平成２年度から３年度にかけて行った遺跡分布調査により、高崎地区内で確認された遺跡数は、164遺跡に上った。

高崎地区内の遺跡の多くは、谷を臨む台地上にある。

旧石器時代の遺跡は、確認されていない。これは、火山噴出物の堆積が厚いため、発見されにくいと思われ、今後発見される可能性がある。

縄文時代の遺跡は、早期・前期・後期・晩期の遺跡は確認されているが、中期の遺跡は確認されていない。集落跡は、後期の栢木（柏木）遺跡と北迫遺跡で竪穴住居跡が確認されている。

弥生時代の遺跡は、高崎川・荒場川中流域・木下川中下流域・炭床川流域・岩瀬川流域に分布している。その大部分は、後期の遺跡である。その中で、朴木遺跡は、中期の石蓋土壌墓が検出され、その中の１基からは無茎磨製石鏃が24本出土した。また、上示野原遺

跡では後期の日向型竪穴住居跡が検出された。

古墳時代の遺跡は、塚原古墳群をはじめとする古墳群と地下式横穴墓の分布が知られている。塚原古墳群の中で、前方後円墳は全長67.6m・後円部径33.4m一同高さ6.0m、前方部長30.0m・同幅22.0m・同高さ4.5mである。この古墳群と同時期の集落跡は確認されていない。

歴史時代の遺跡としては、平安時代前期の越州窯青磁碗を出土した政所第2遺跡が注目される。中世には、地区内全域に遺跡の分布が広がり、多くの山城が築かれる。

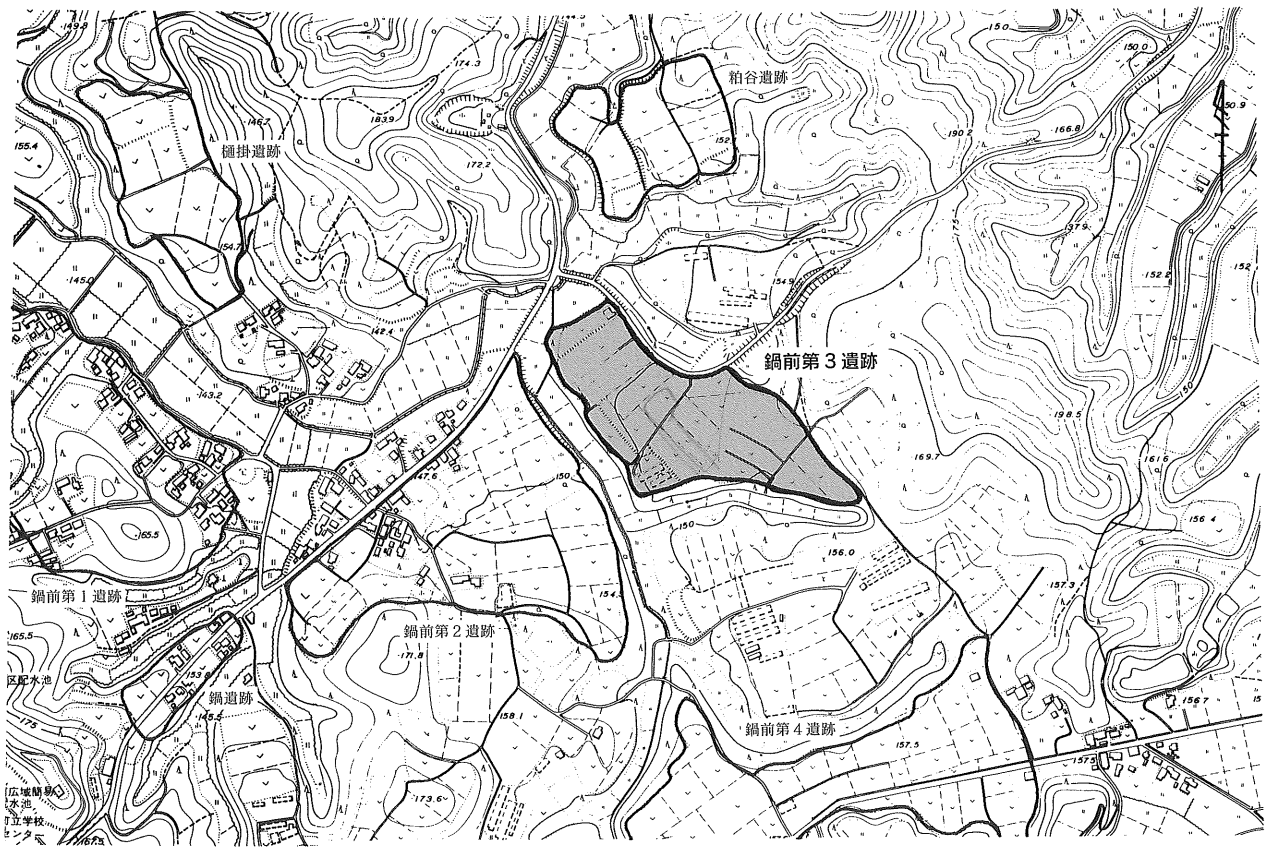
Ⅲ 鍋前第３遺跡の概要

鍋前第３遺跡がある地域は、高崎地区のほぼ中央部で、狭小な谷の合流点にあたる。標高155mの台地にあり、南東から北西へ向けて緩やかに傾斜している。

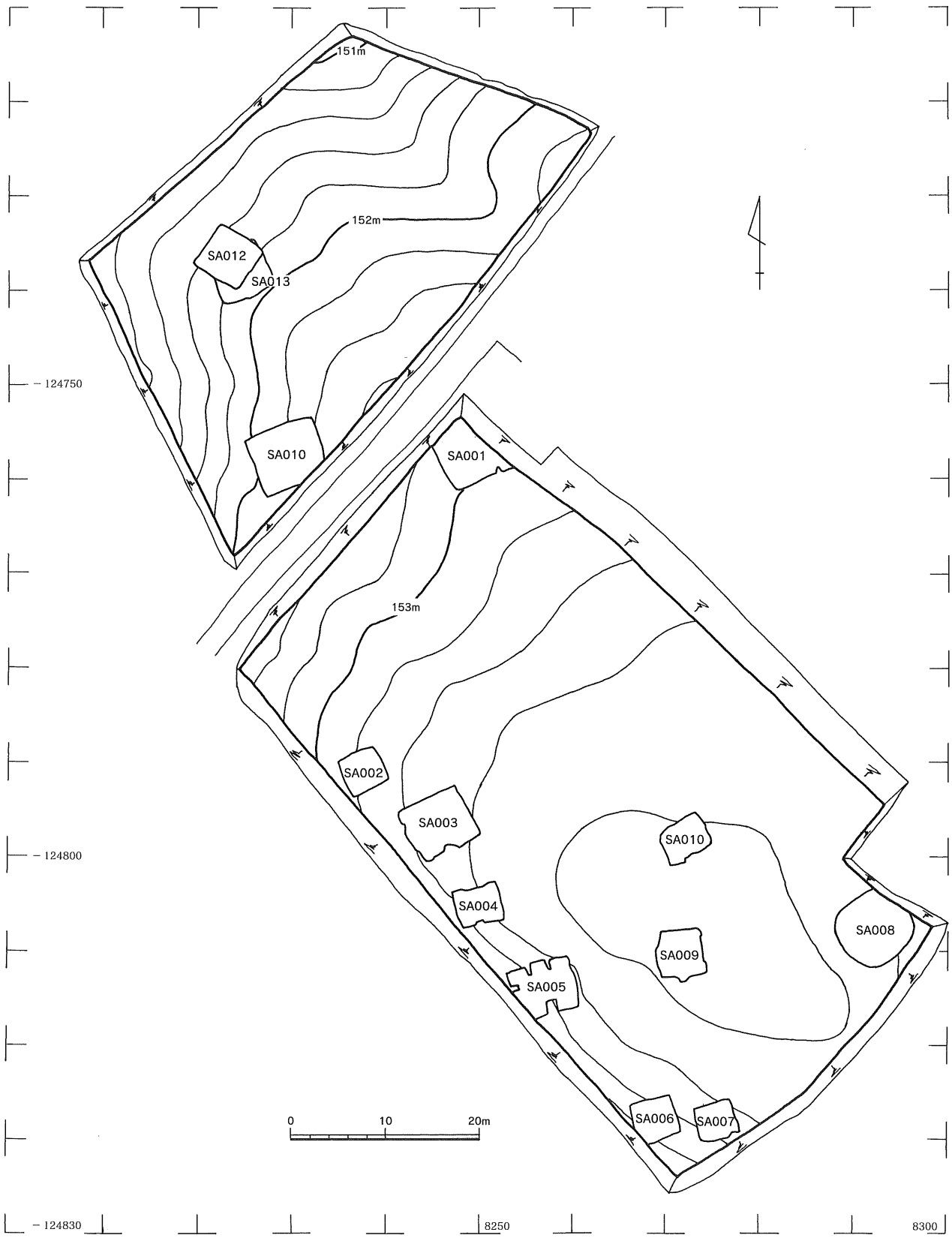
周辺には、谷を隔てて同時代の遺物の散布が確認されているが、その内容まで確認されている遺跡はない。

基本的層序は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：黒色土と高原スコリアの混入土層、Ⅲ層：高原スコリア、Ⅳ層：黒色土（赤褐色粒が少量混入）、Ⅴ層：黒色土（Ⅶが少量混入）、Ⅵ層：黒色土（Ⅶが混入）、Ⅶ層：御池降下軽石層である。Ⅴ層が、遺物包含層で、遺構はすべてⅦ層上面で検出された。

検出された遺構は、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての13基の竪穴住居跡がある。唯一円形の住居跡であるSA８を除いて、南西向き斜面から北西向き斜面にかけて検出された。



第１図　遺跡位置図（S＝1/10,000）



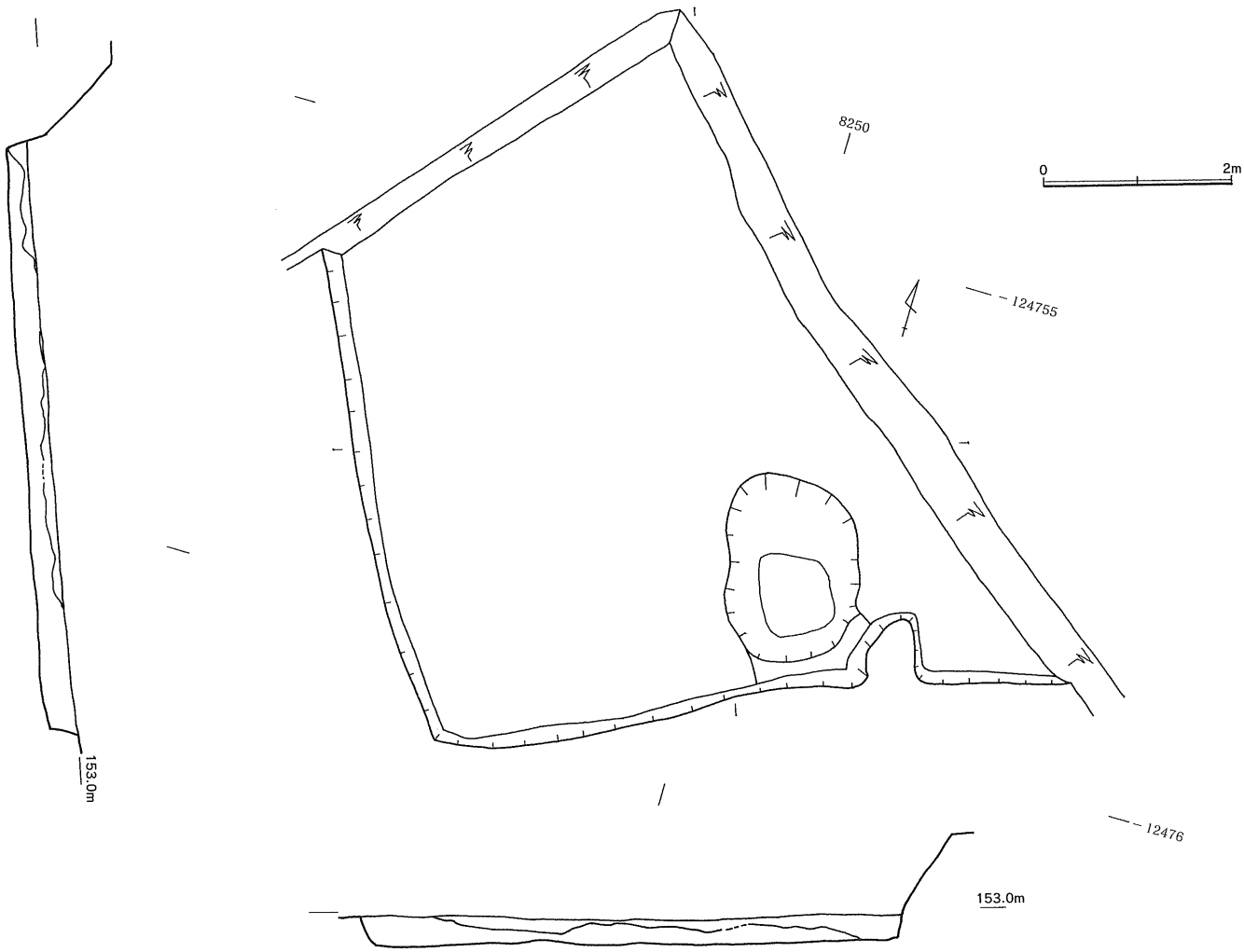
第２図　遺構配置図（S＝1/800）

Ⅳ 検出遺構

1．1号竪穴集居跡（SA001）

本住居跡は、北西向き斜面の標高153mの位置で検出された。

調査区の端で検出されたため、規模は不明である。一辺７mを超える方形ないしは長方形の竪穴住居跡である。残存する壁高は、南壁で30cmである。南壁には、上端で50cm×70cmの突出部が確認された。この突出部に接して、上端で長径２m・短径1.4m・深さ12cmの規模で、床面に掘り込みがあり炉跡ではないかと思われる。焼土も確認されず、底面に熱を受けた痕跡も確認できなかった。

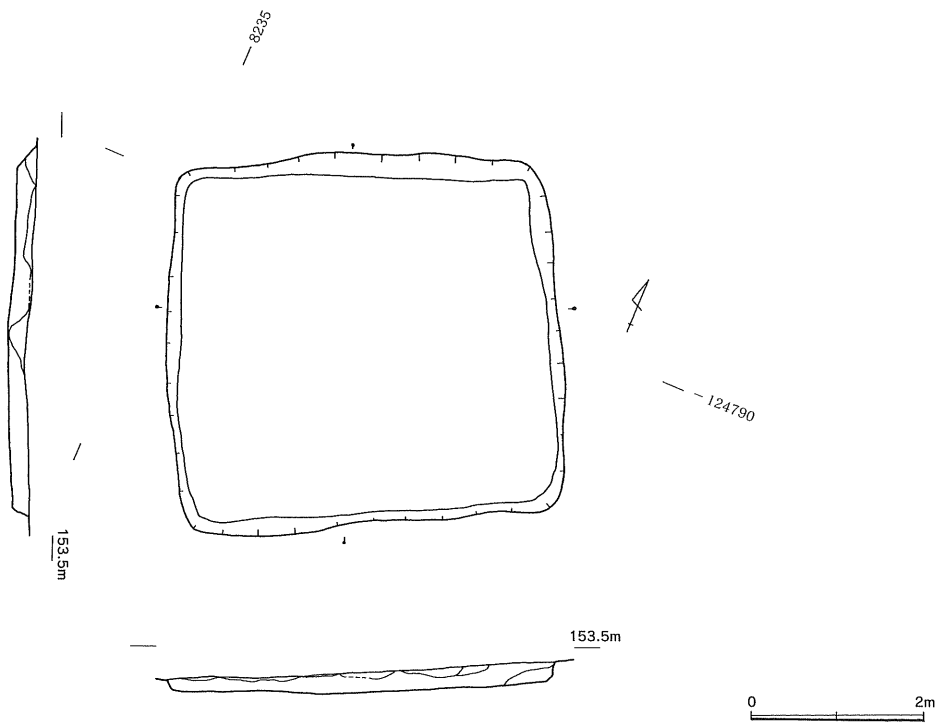


第３図　１号住居跡（S＝1/80）

２．２号竪穴住居跡（SA002）

本住居跡は、最高部からやや下った標高153.2mの北西向き斜面で検出された。南東３mに３号住居跡がある。

長軸4.55m・短軸4.2mの長方形の竪穴住居跡である。残存する壁高は、東壁で24cmである。竪穴内で、炉跡やピットなどは検出されなかった。

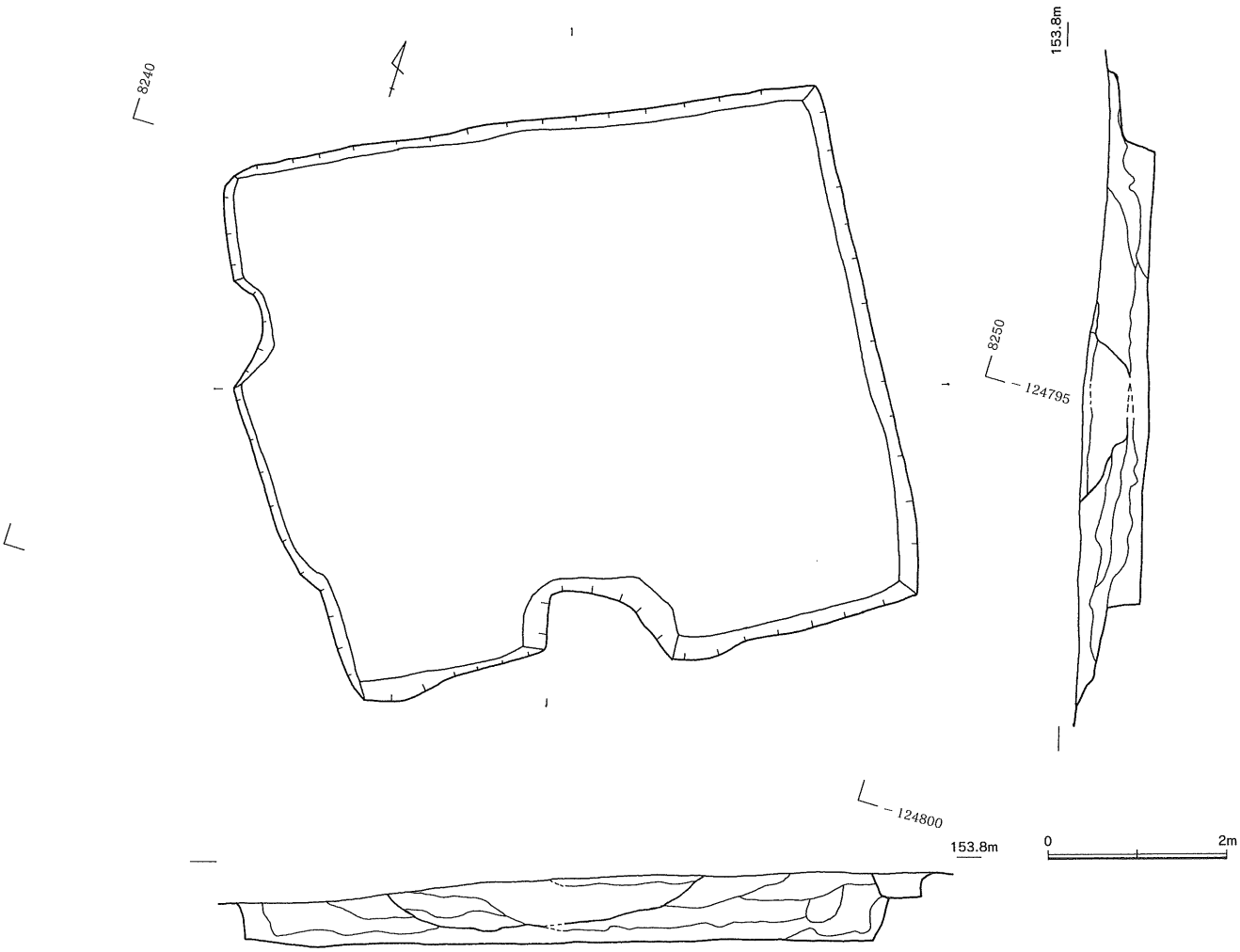


第４図　２号住居跡（S＝1/80）

３．３号住居跡（SA003）

本住居跡は、最高部からやや下った標高153.5mの北西向き斜面で検出された。北西３mに２号住居跡が、南南東４mに４号住居跡がある。

長軸7.18m・短軸6.23mの長方形で、残存する壁高は、80cmである。南壁中央部と西壁北側に間仕切り用の突出部が見られる。南壁の突出部は幅1.4mで長さ68cmにわたって、竪穴内に突出している。



第５図　３号住居跡（S＝1/80）

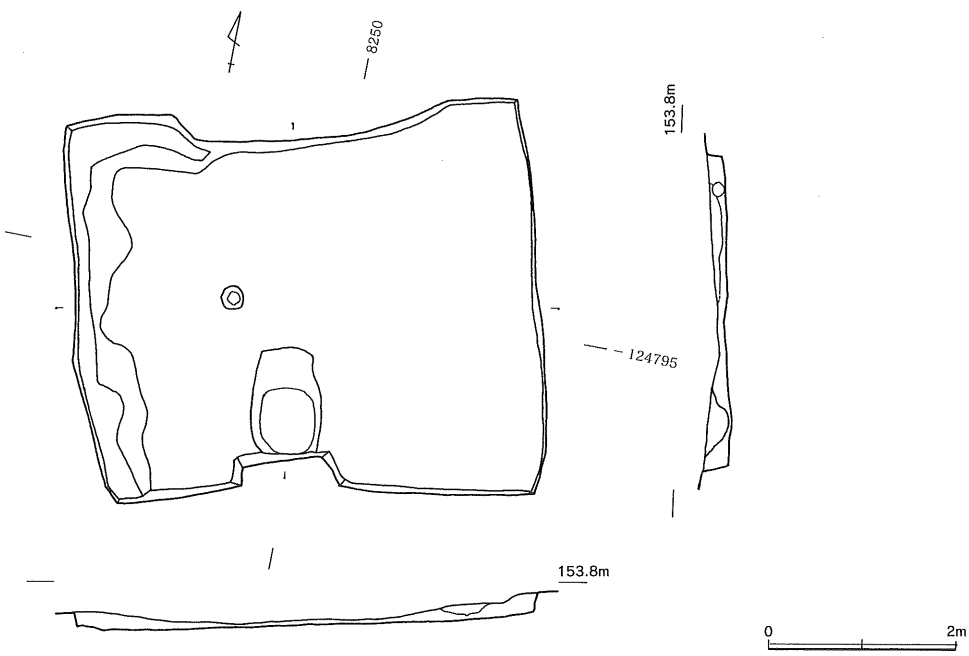
４．４号住居跡（SA004）

本住居跡は、最高部からやや下った標高153.5mの北西向き斜面で検出された。

北北西４mに３号住居跡が、南東6.5mに５号住居跡がある。

長軸4.92m・短軸3.78mの長方形であるが、北壁はやや窪んでいる。残存壁高は、22cmである。南壁中央部に幅１m、長さ27cmの長方形の突出部がある。

この突出部の直下には、上端で長軸１m、短軸80cmの長方形の炉跡が確認された。深さは、10cmである。焼土は非常にわずかであるため、長期間の使用は考えられない。



第６図　４号住居跡（S＝1/80）

５．５号住居跡（SA005）

本住居跡は、最高部からやや下った標高153.5mの西向き斜面で検出された。

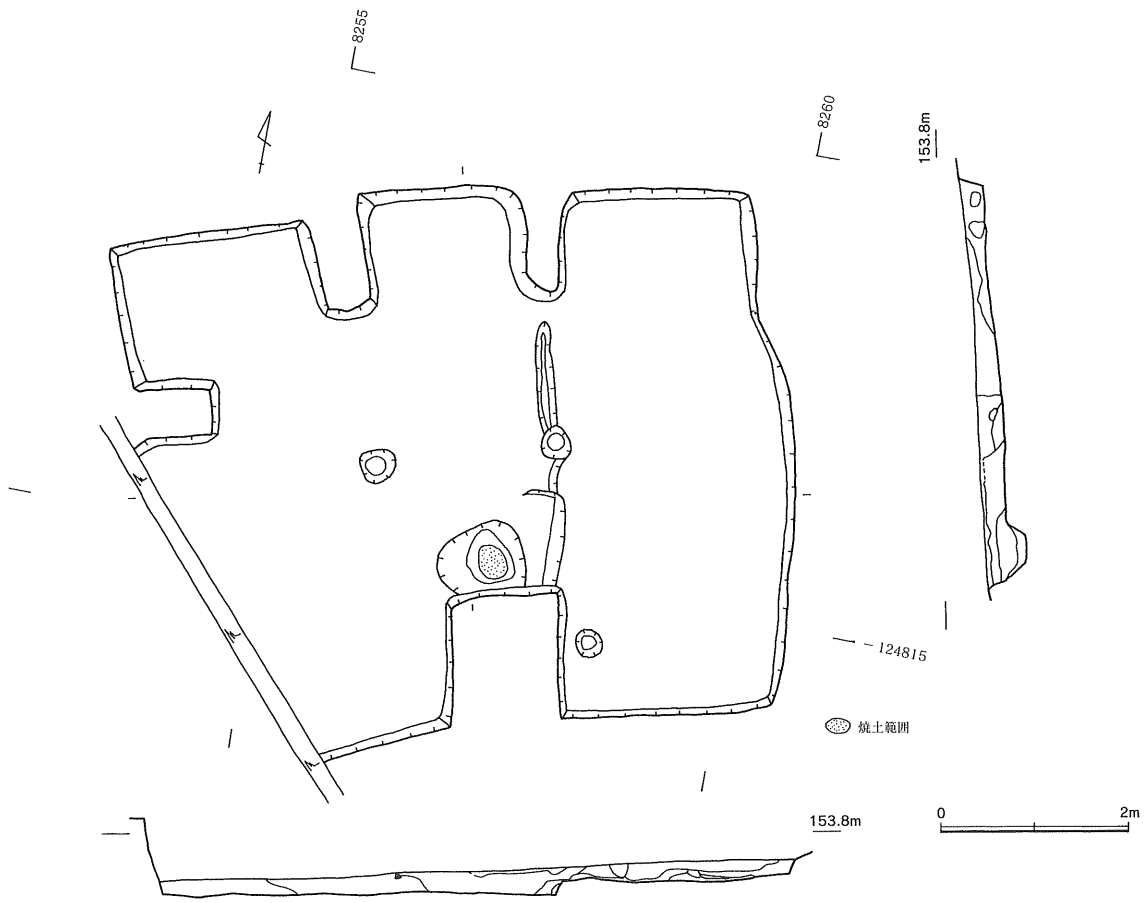
北西５mに４号住居跡が、東10mに９号住居跡がある。

本住居跡は、調査区の端で検出されたため、全体の規模は不明である。長軸6.9m以上、5.7m以上の長方形であると考えられる。北壁での残存壁高は、22cmである。

北壁に1.1m×36cm、1.1m×50cmの２箇所、西壁には、80cm×48cmの１箇所、南壁に1.35m×60cmの１箇所の突出部がある、典型的な間仕切り住居である。

柱穴と思われるピットを3箇所検出した。竪穴中央に東西に並ぶ柱穴は、床面で径40cmで深さ50cmである。東側の柱穴から北壁東の突出部へ向って、幅20cmで深さ10cmの非常に細い溝状の掘り込みが1.1mにわたって検出された。この溝状の掘り込みを境として、東側の床面が14cmほど高くなっている。このため、この溝状の掘り込みは、段差を保護するために板などで土留めを行ったことが推測される。

南壁の突出部直下には、上端94cm×70cmの不整円形で、深さ21cmの炉跡が検出された。炉跡底面は、熱による硬化が顕著ではない。



第７図　５号住居跡（S＝1/80）

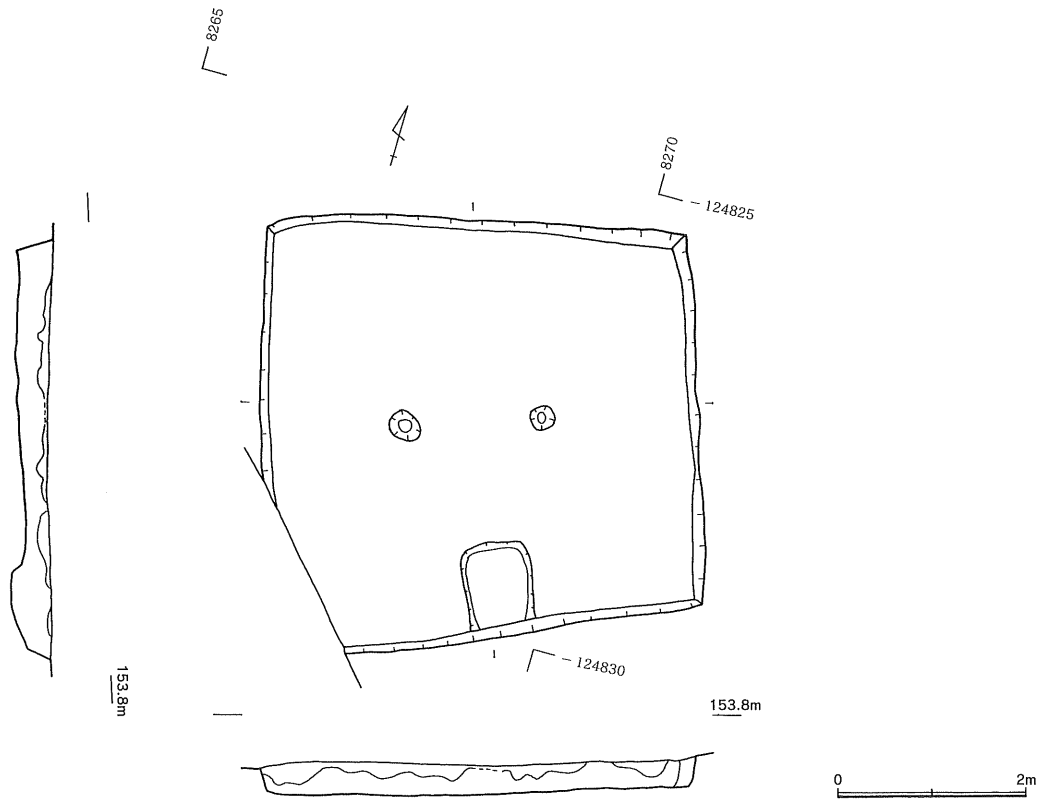
６．６号住居跡（SA006）

本住居跡は、調査区南端の最高部からやや下った標高153.3mの南南西向き斜面で検出された。東側に接するように７号住居跡がある。

長軸4.7m、短軸4.44mのほぼ正方形であると思われる。残存する壁高は、東壁で26cmである。

竪穴内中央で、東西に並んだ2本のピットが検出された。柱穴と思われる。床面上で東のピットは、26cm×24cmの隅丸方形で、深さ40cmである。西のピットは、同じく38cm×28cmの楕円形で、深さ29cmである。

南壁中央部直下に、炉跡と思われる掘り込みが検出された。床面上で長軸86cm、短軸75cm、深さ18cmの長方形の掘り込みである。焦土も確認されず、炉跡底面も、熱による硬化が顕著ではない。



第８図　６号住居跡（S＝1/80）

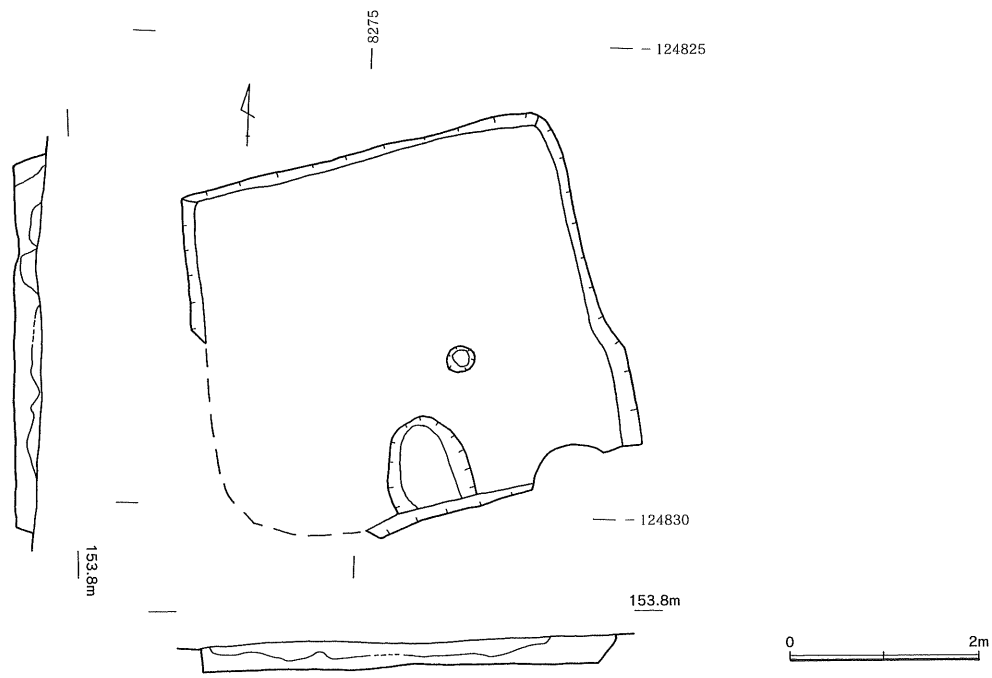
7．7号住居跡（SA007）

本住居跡は、調査区南端の最高部からやや下った標高153.5mの南南西向き斜面で検出された。西側に接するように6号住居跡がある。

南西のコーナーは、削平されて検出できなかった。長軸4.4m、短軸4mの長方形である。

竪穴内ほぼ中央部で、径30cmで深さ10cmのピットが検出された。

南壁中央直下で、長軸90cmの楕円形で深さ10cmの炉跡と思われる掘り込みが検出された。焦土も確認されず、炉跡底面も、熱による硬化が顕著ではない。



第9図　7号住居跡（S＝1/80）

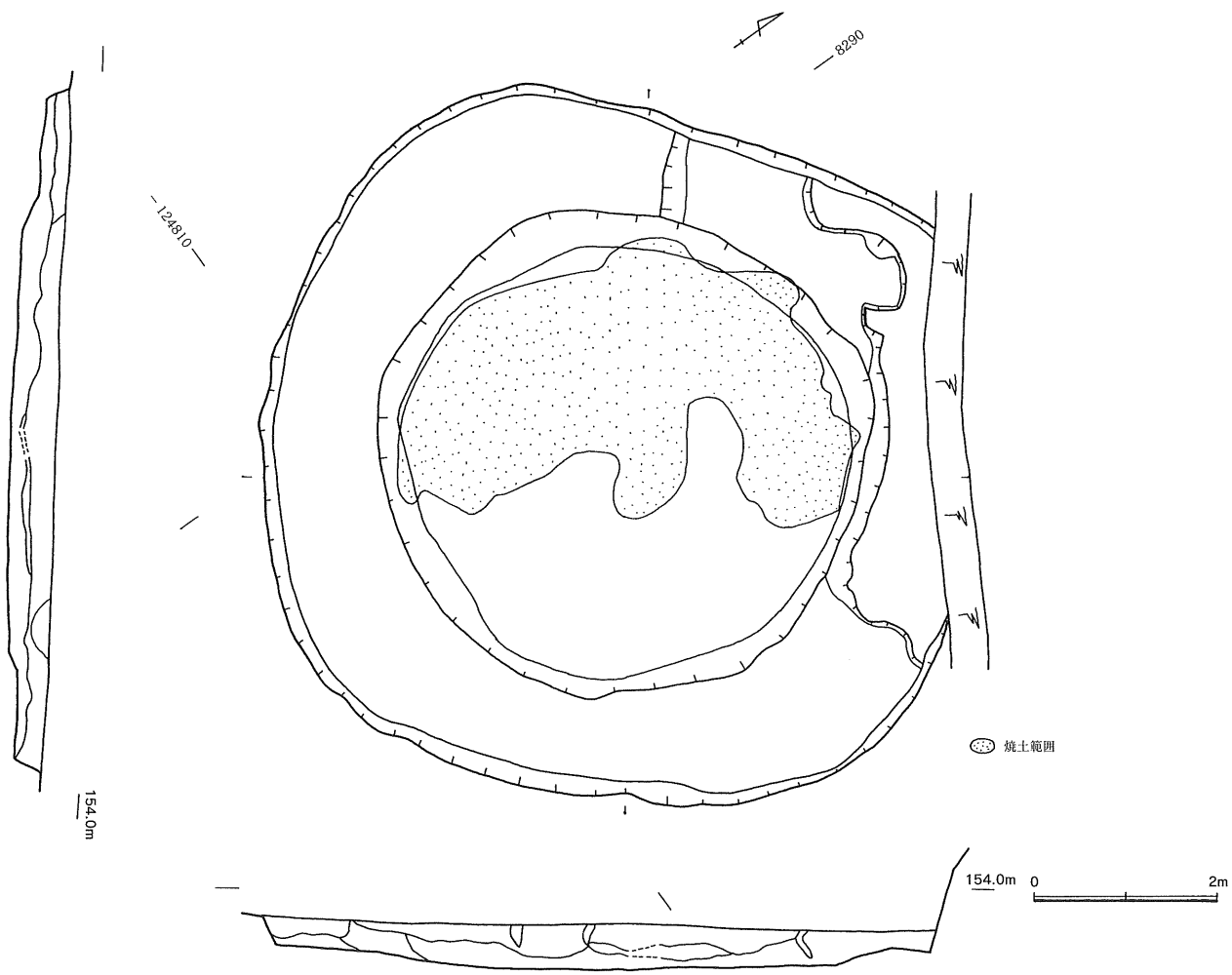
８．８号住居跡（SA008）

本住居跡は、調査区東端の最高部からやや下った標高153.6mの南東向き斜面で検出された。

調査区の端であるため、全体の規模はつかめなかった。長軸7.32m以上、7.4mの隅丸長方形もしくは、楕円形であると思われる。

竪穴内は、10～20cm程度の段差で大きく２分割されている。内側が低く、外側が高い状態である。内側の床面西半分は、熱を受けて床面が焼けている。

本住居跡だけが他の検出された住居跡とは、立地も形態もまったく異質で、同時期のものではないと思われる。



第10図　８号住居跡（S＝1/80）

９．９号住居跡（SA009）

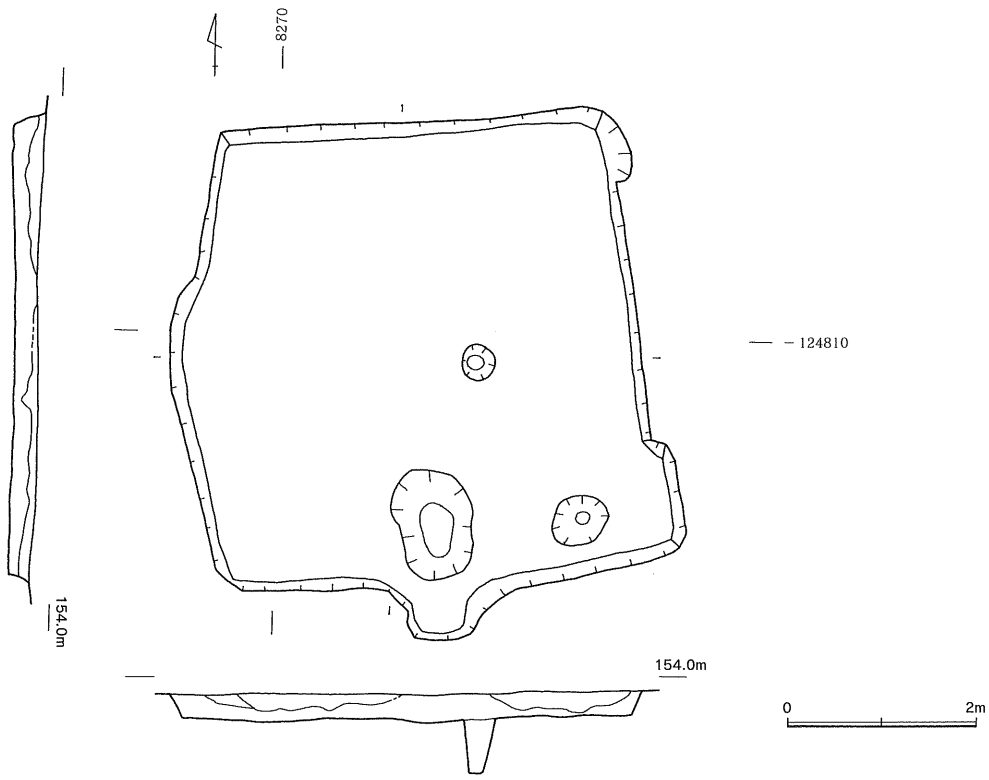
本住居跡は、調査区最高部、標高153.8mで検出された。北側6.6mに10号住居跡がある。

一辺５mの方形を基本としているが、南壁中央部が53cmほど外側へ拡張されている。

竪穴内ほぼ中央で、ピットが１本検出された。径36cmで、深さ57cmである。

他に２箇所の掘り込みが検出された。南西隅で検出された掘り込みは、65cm×52cmの楕円形で、深さ28cmである。

もう一つの掘り込みは、南壁が外側へ拡張された付近で検出された。117cm×86cmの不整楕円形で、深さ25cmである。この掘り込みは、他の住居跡の構造から推測すると、炉跡と思われるが焼土や熱による硬化などは、まったく確認できなかった。また、外側への拡張部分と何らかの関係があると思われるが、具体的な資料は得られなかった。



第11図　９号住居跡（S＝1/80）

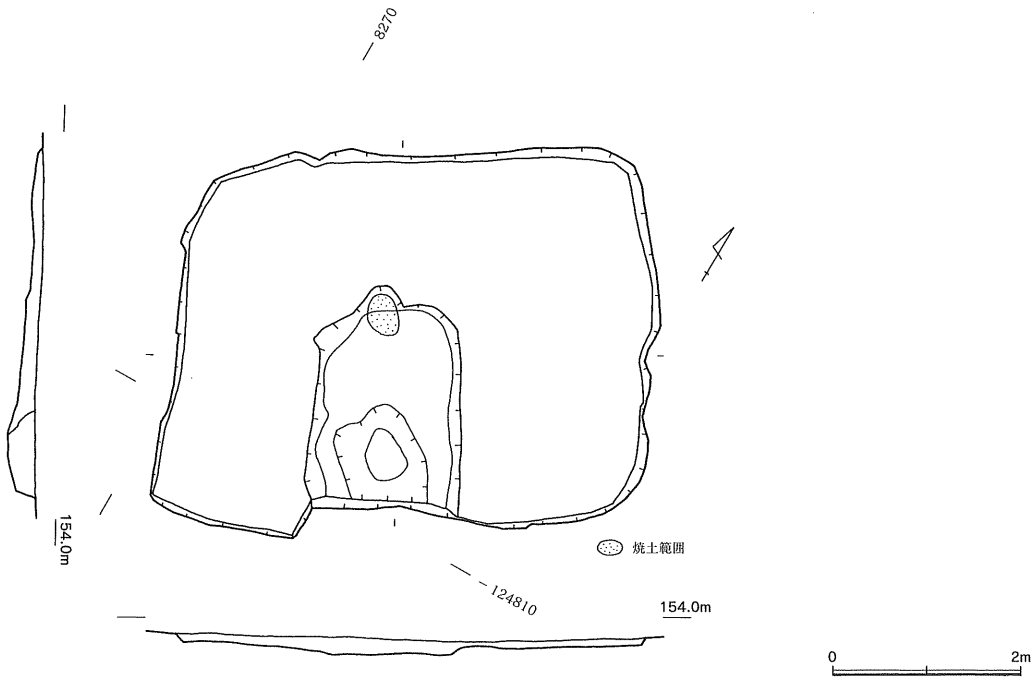
10．10号住居跡（SA010）

本住居跡は、調査区最高部、標高153.8mで検出された。南側6.6mに９号住居跡がある。

長軸4.96mで、短軸3.7mの不整長方形である。残存壁高は、８センチである。

床面は、北から南へ緩やかに傾斜している。南壁中央で、２段に別れた掘り込みが検出された。浅い部分は、208cm×145cmの長方形を基本としている。

床面からの深さは、５cm程度である。この浅い掘り込みの北端で、炉跡と思われる、床面が焼けた部分が検出された。この掘り込み内の南壁直下は、更に一辺100cmで、深さ18cm掘り込まれている。しかし、この部分からは、焼けた痕跡は検出できなかった。



第12図　10号住居跡（S＝1/80）

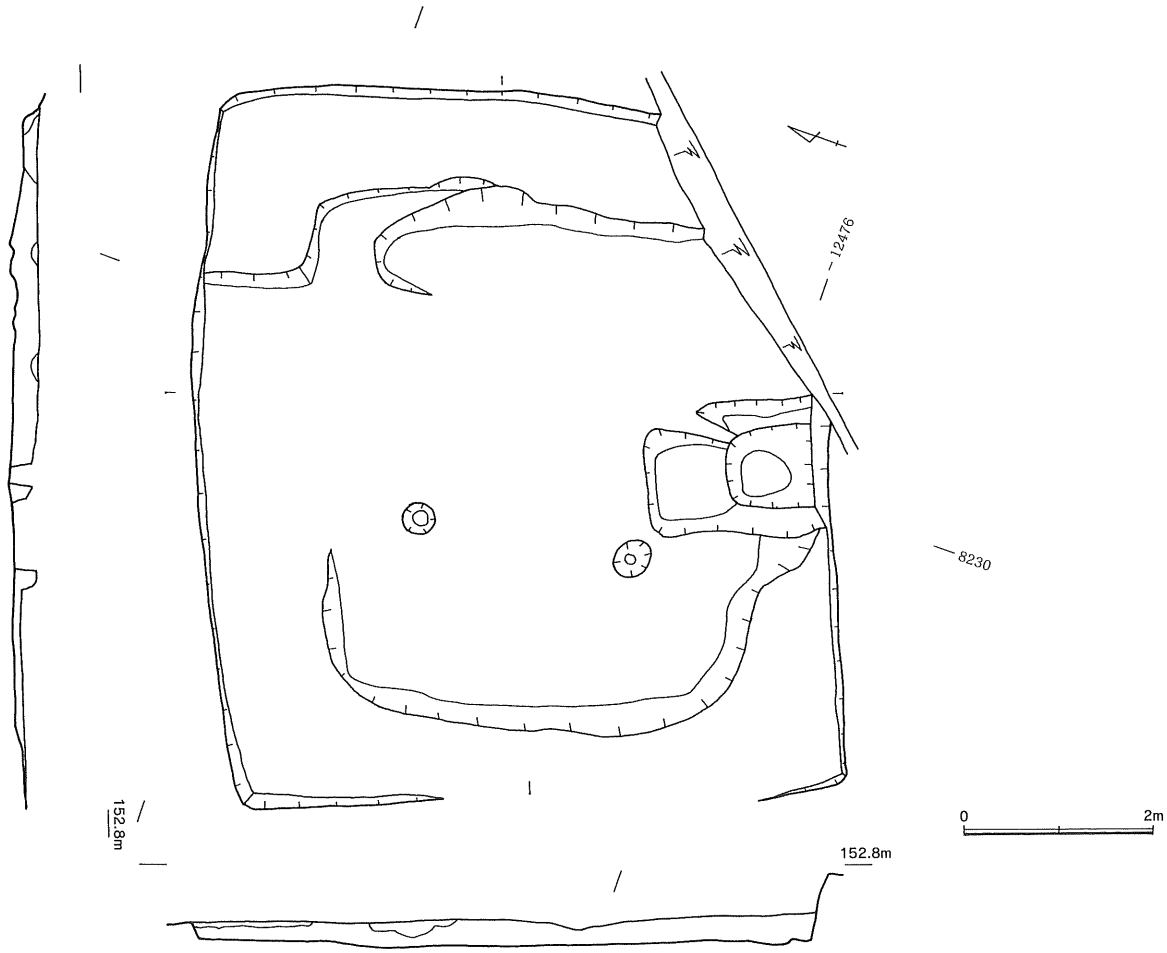
11．11号住居跡（SA011）

本住居跡は、調査区の北側のやや傾斜が急になる標高152.2mで検出された。西側５mに１号住居跡がある。

農道が通っているため、全体は把握できなかった。また、西壁は削平されている。長軸7.5m、短軸6.66mの東西に長い長方形で、残存壁高は北壁で20cmである。

竪穴内は、段差で３分割されている。東が20cm、西が15cmそれぞれ中央部より高くなっている。中央部でピットが２本検出された。共に径35～40cmで、床面からの深さは、北側が38cm、南側が32cmである。この２本は柱穴と思われる。

南壁直下で、炉跡と思われる掘り込みが確認された。長軸176cm×短軸140cmの長方形である。大きく２段に掘り込まれている。壁直下が７cm深い。炉跡と思われるが、焼土や焼けた痕跡は確認されなかった。



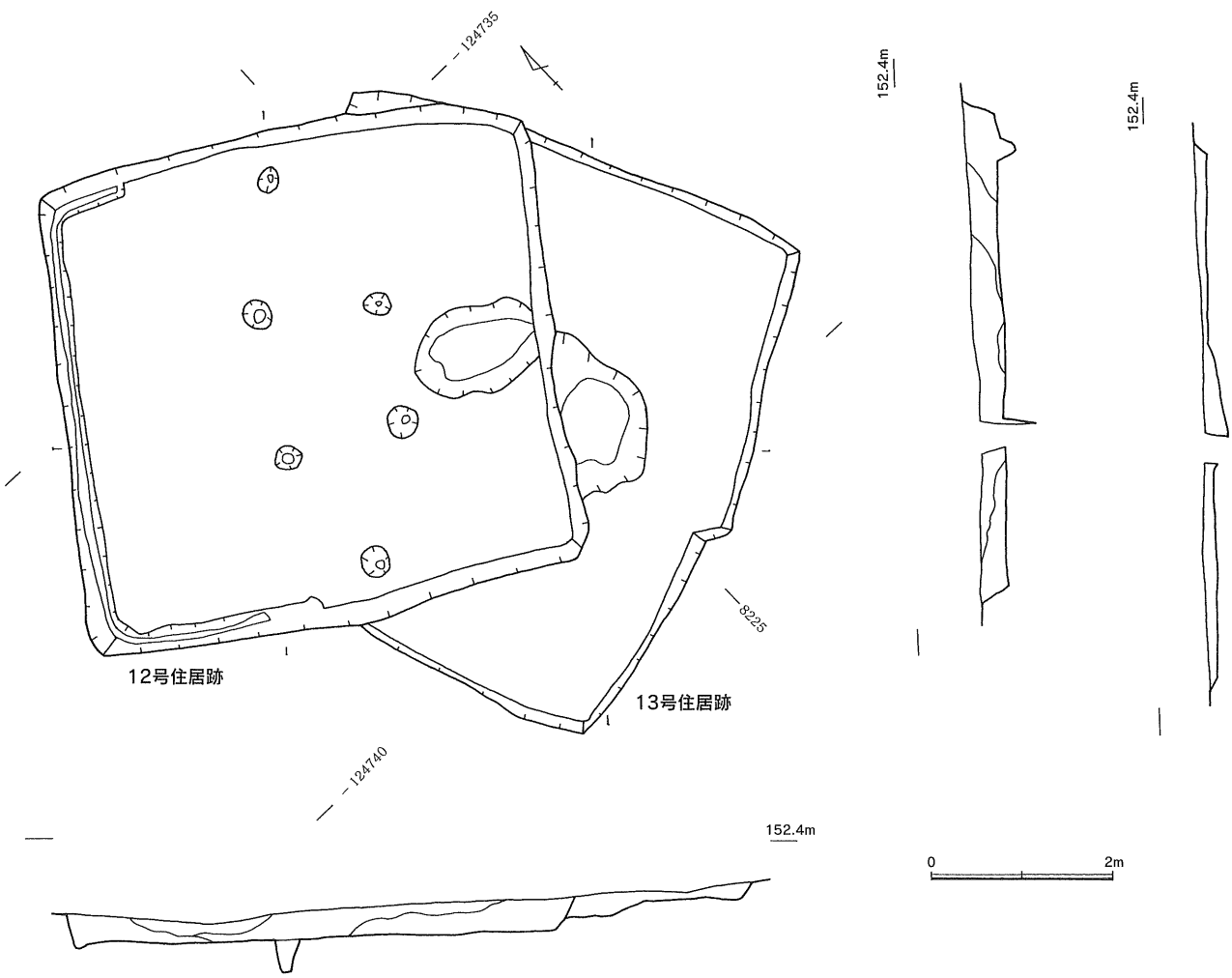
第13図　11号住居跡（S＝1/80）

12．12号住居跡・13号住居跡（SA012・SA013）

本住居跡は、調査区の北側の傾斜が急になる標高151.8mで切りあって検出された。

13号住居跡が古く、その廃棄後、12号住居跡が構築されている。12号住居跡は、一辺5.5mの正方形である。ピットが6本検出された。いずれも、径30cm前後の円形で、深さは40cm前後である。東壁に接して、130cm×100cmの楕円形で、深さ10cmの掘り込みが検出された。炉跡と思われる。

13号住居跡は、一辺5.8m程度の方形ではないかと思われる。床面中央やや南よりに、炉跡と思われる堀り込みが、検出された。



第14図　12号・13号住居跡（S＝1/80）

図　　版

調査地点近景（１号住居跡　北より）

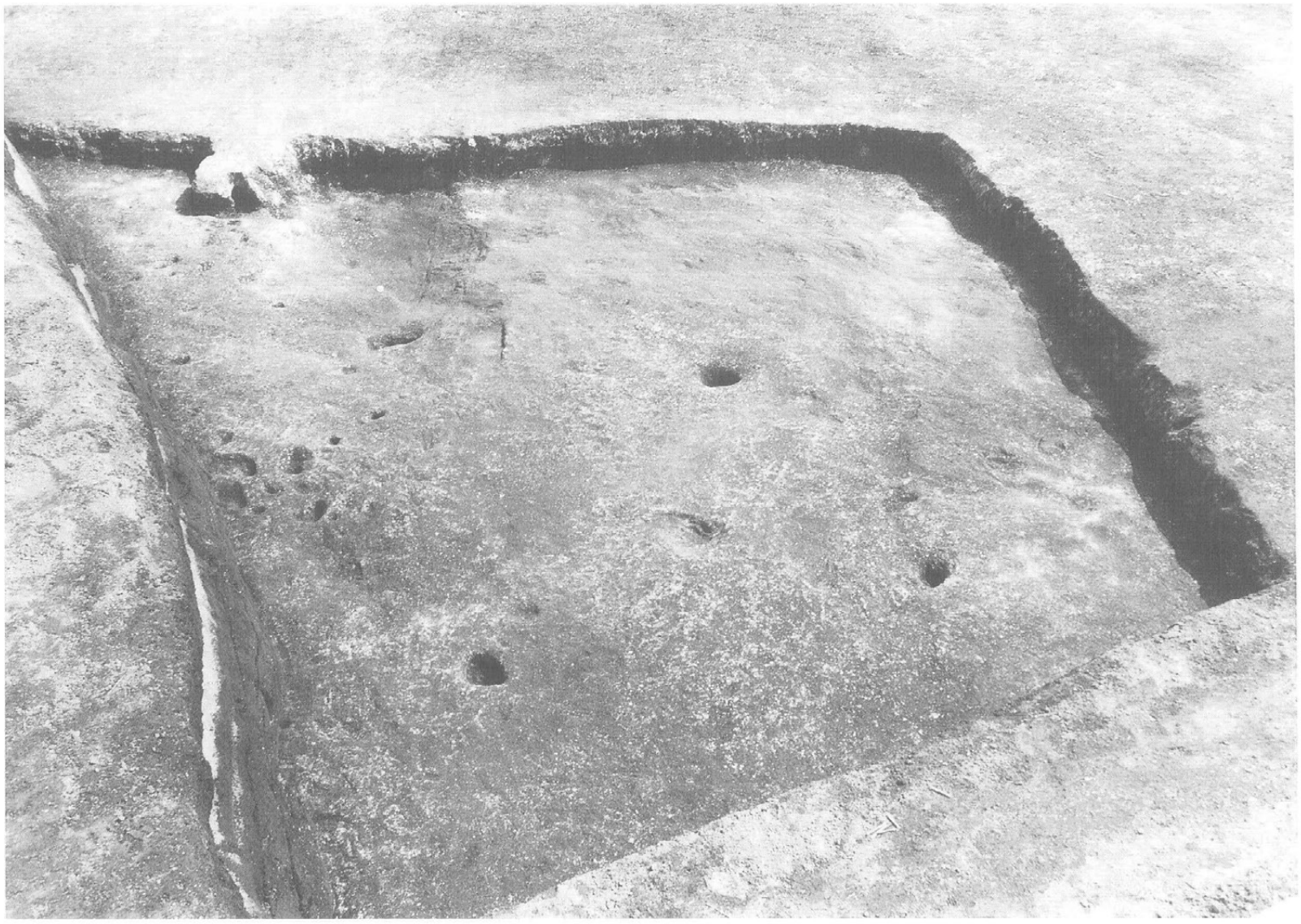
調査地点近景（２号住居跡　北西より）

調査地点近景（６号住居跡　南より）

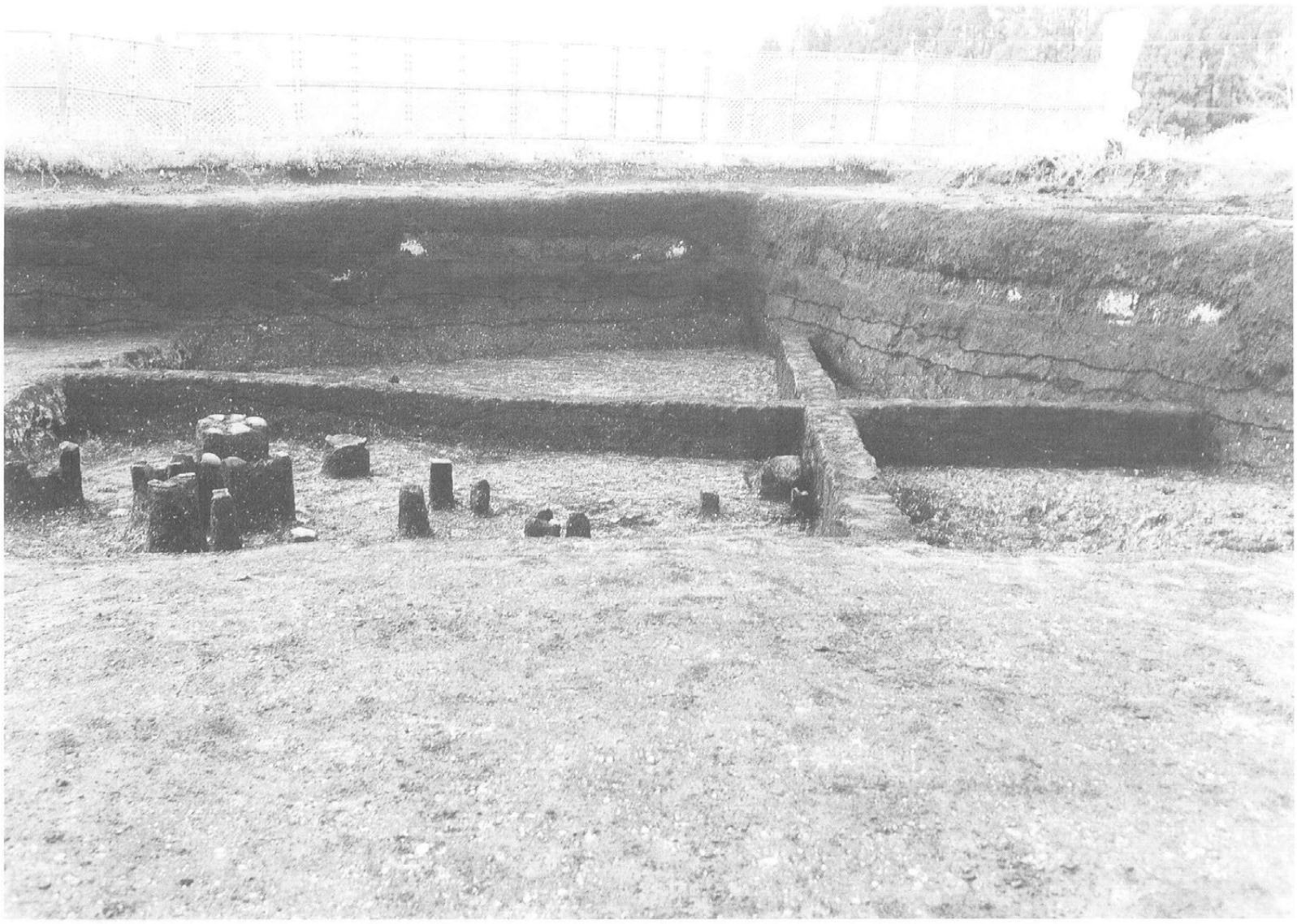
調査地点近景（８号住居跡　北東より）

調査地点近景（11～13号住居跡　南西より）

調査地点近景（11～13号住居跡　北東より）



1号住居跡全景（北より）



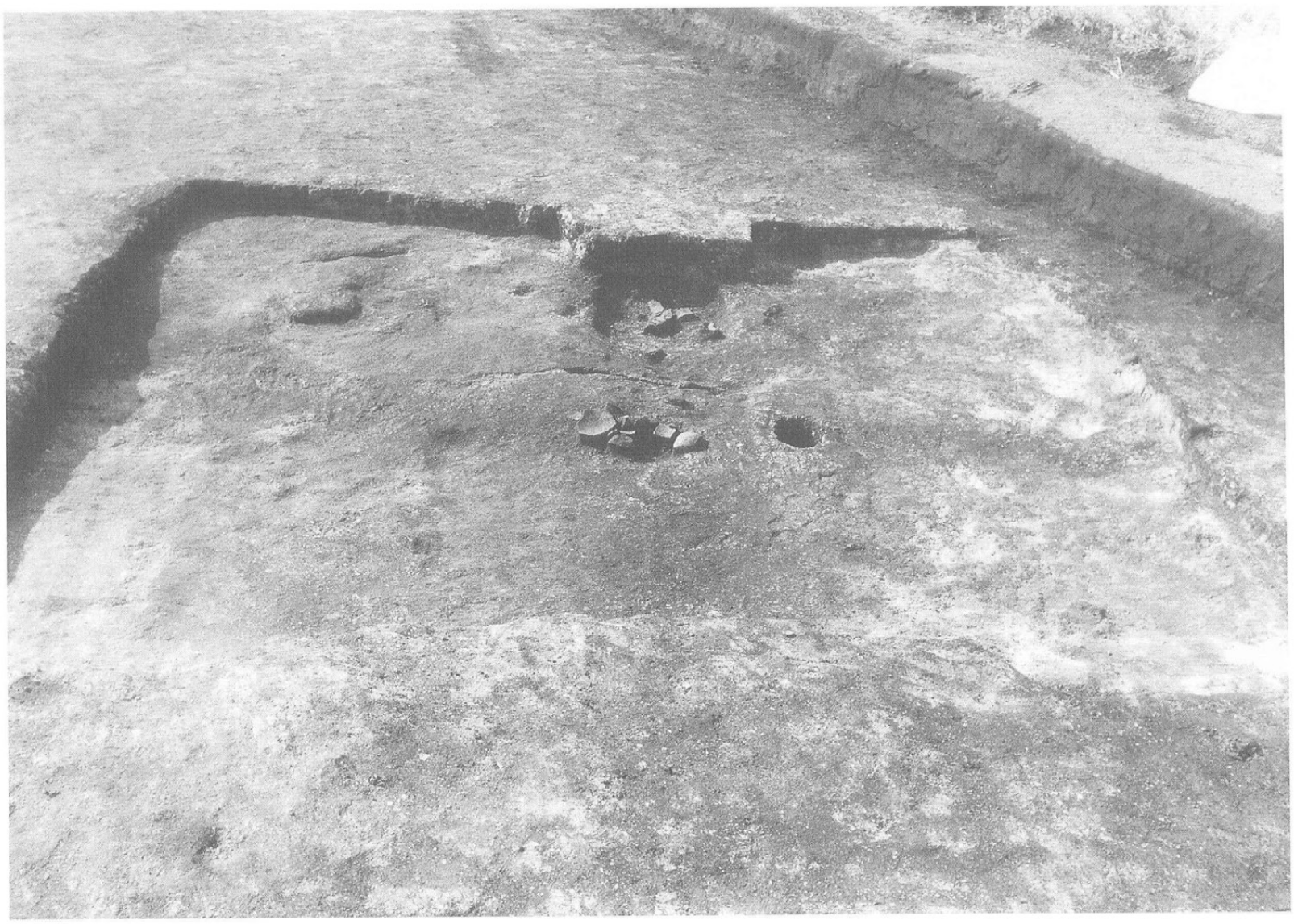
1号住居跡層序（南より）

２号住居跡全景（北東より）

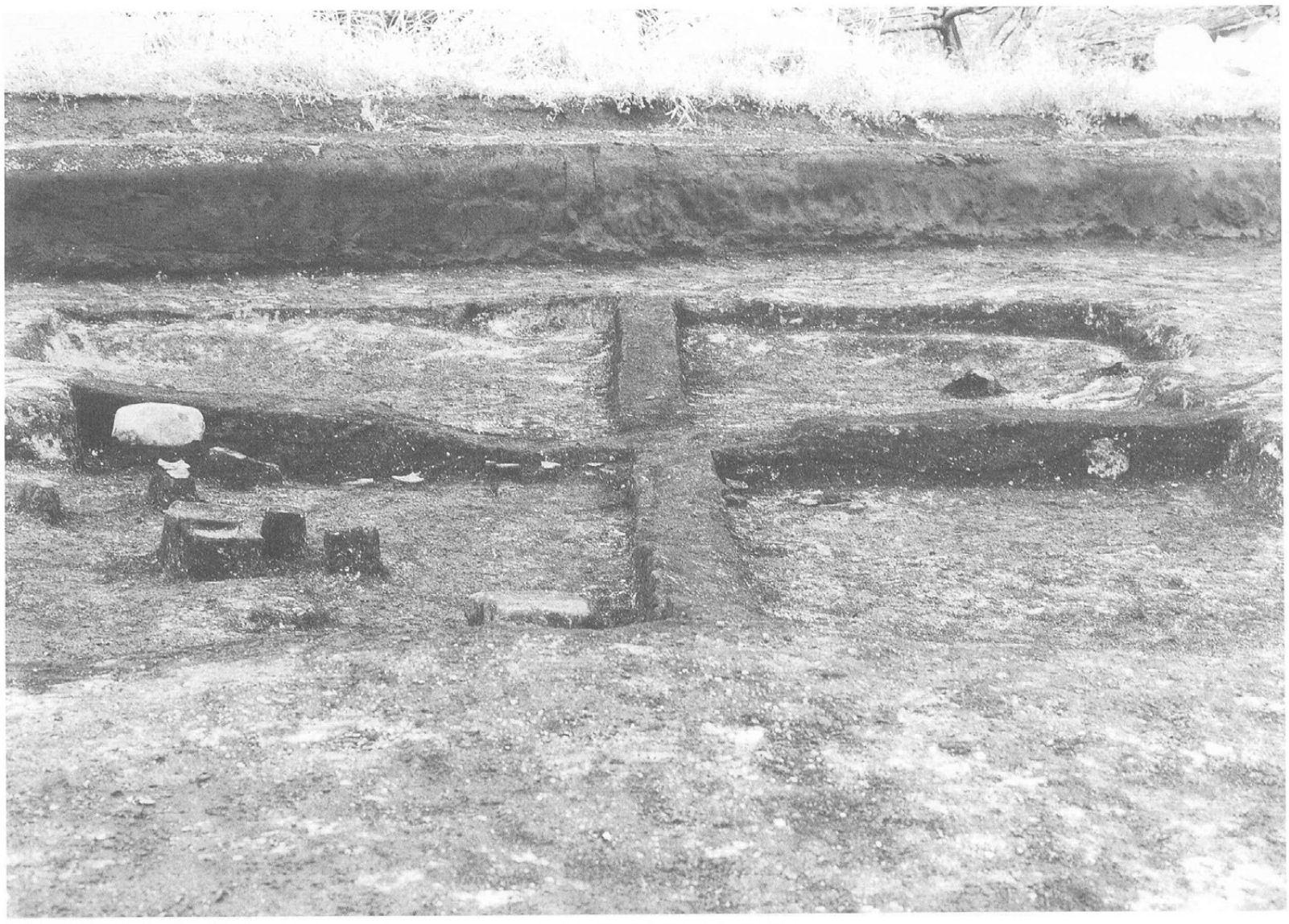
２号住居跡層序（南東より）

３号住居跡全景（北西より）

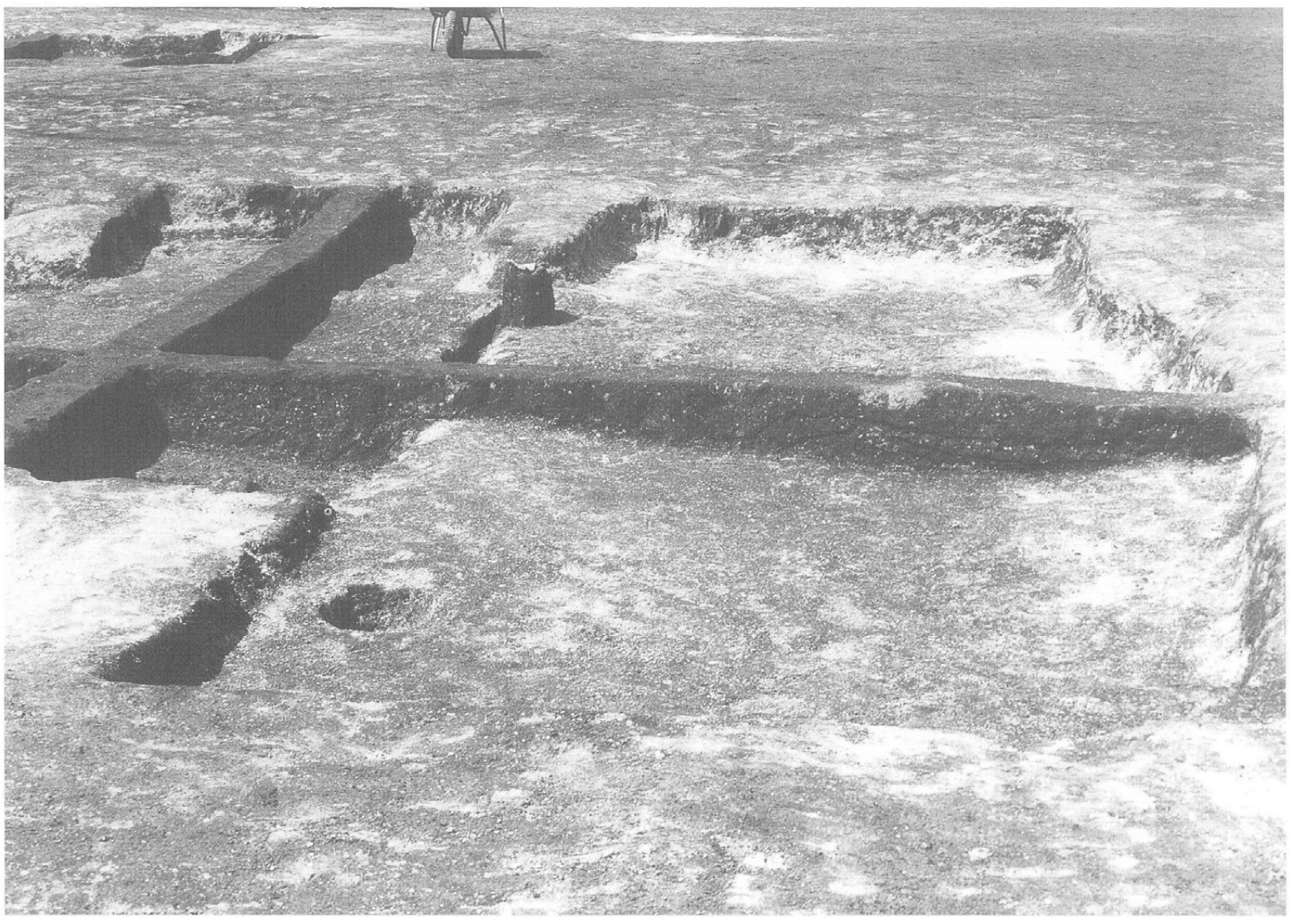
３号住居跡層序（南東より）



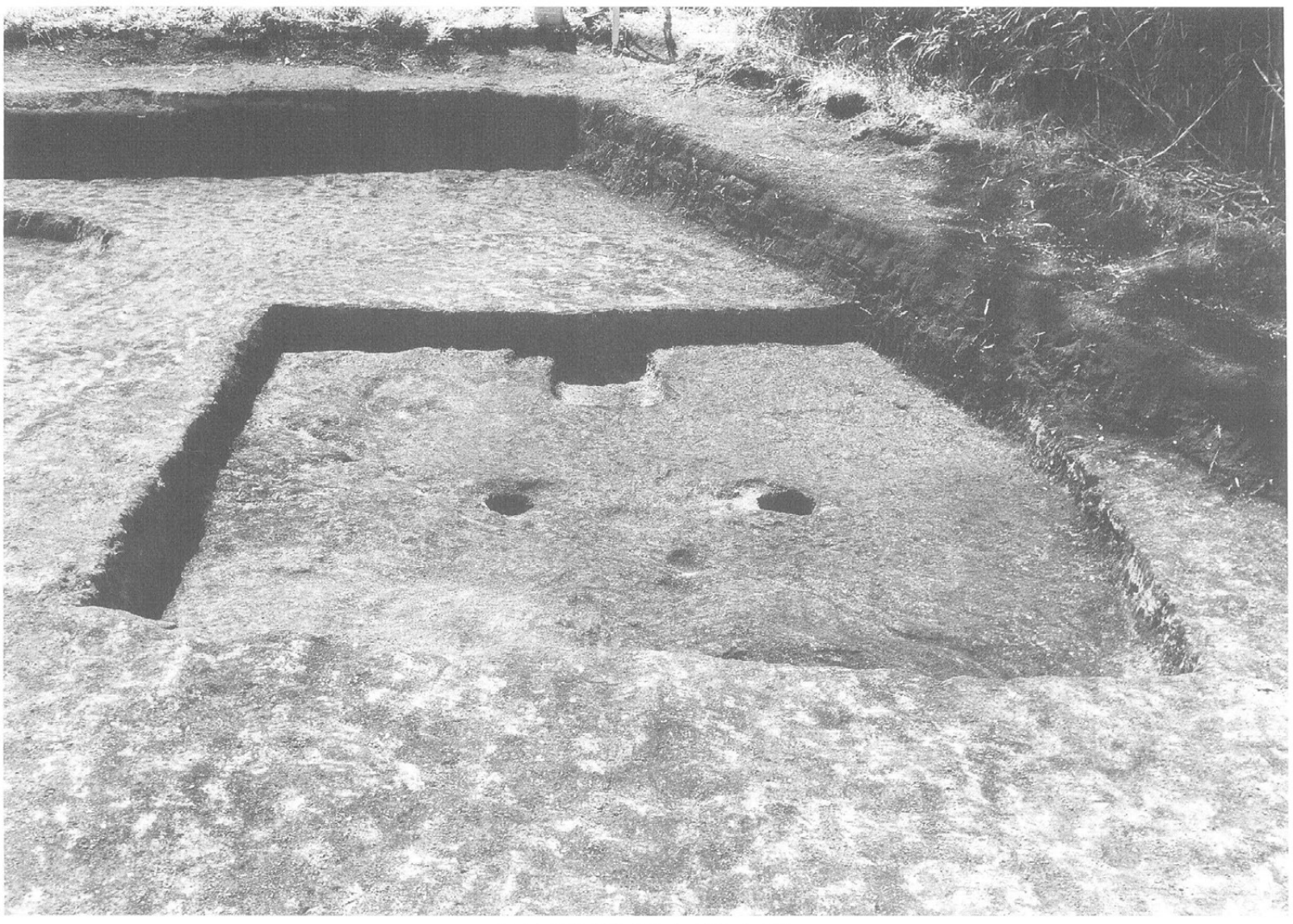
４号住居跡全景（北より）



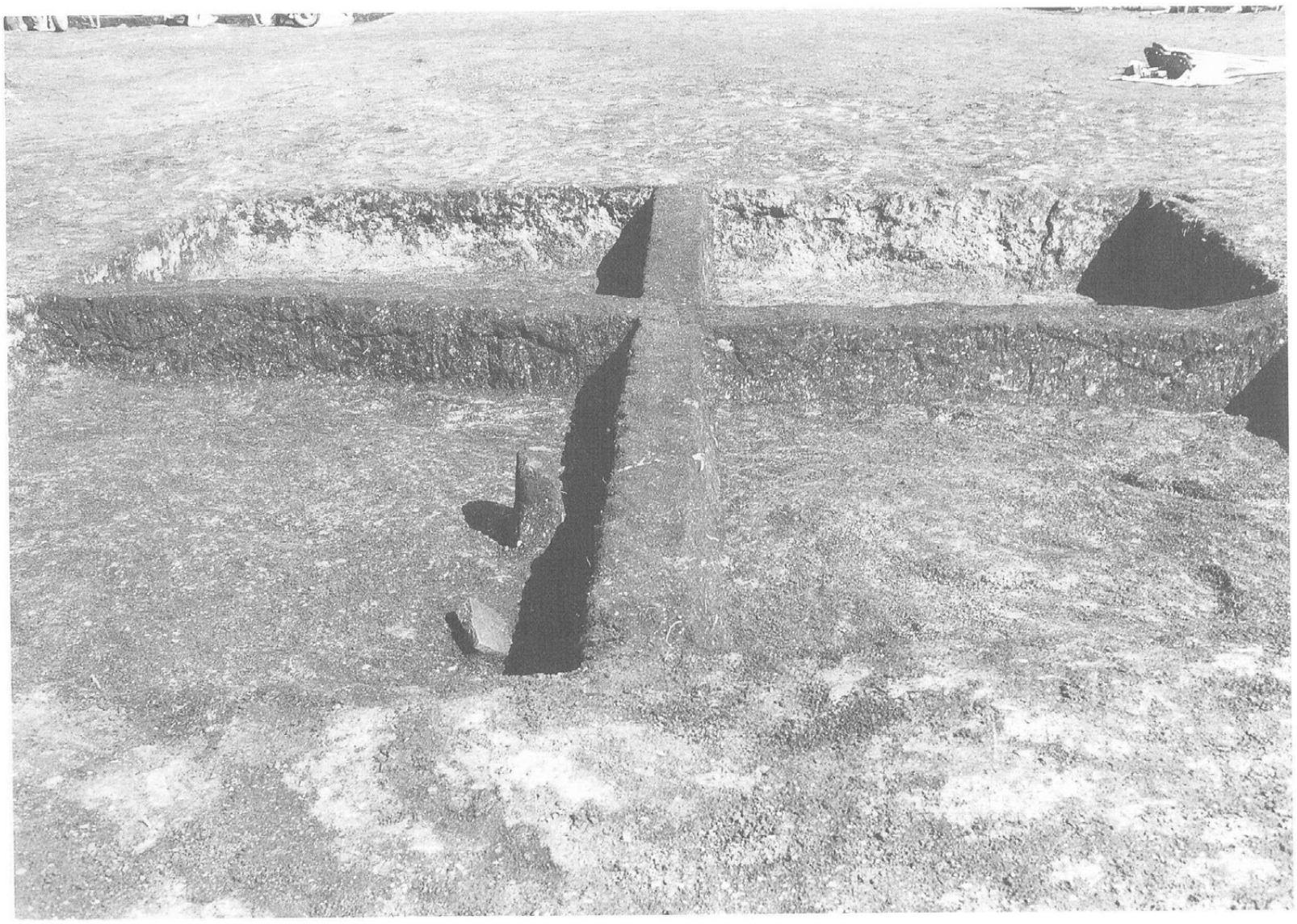
４号住居跡層序（東より）



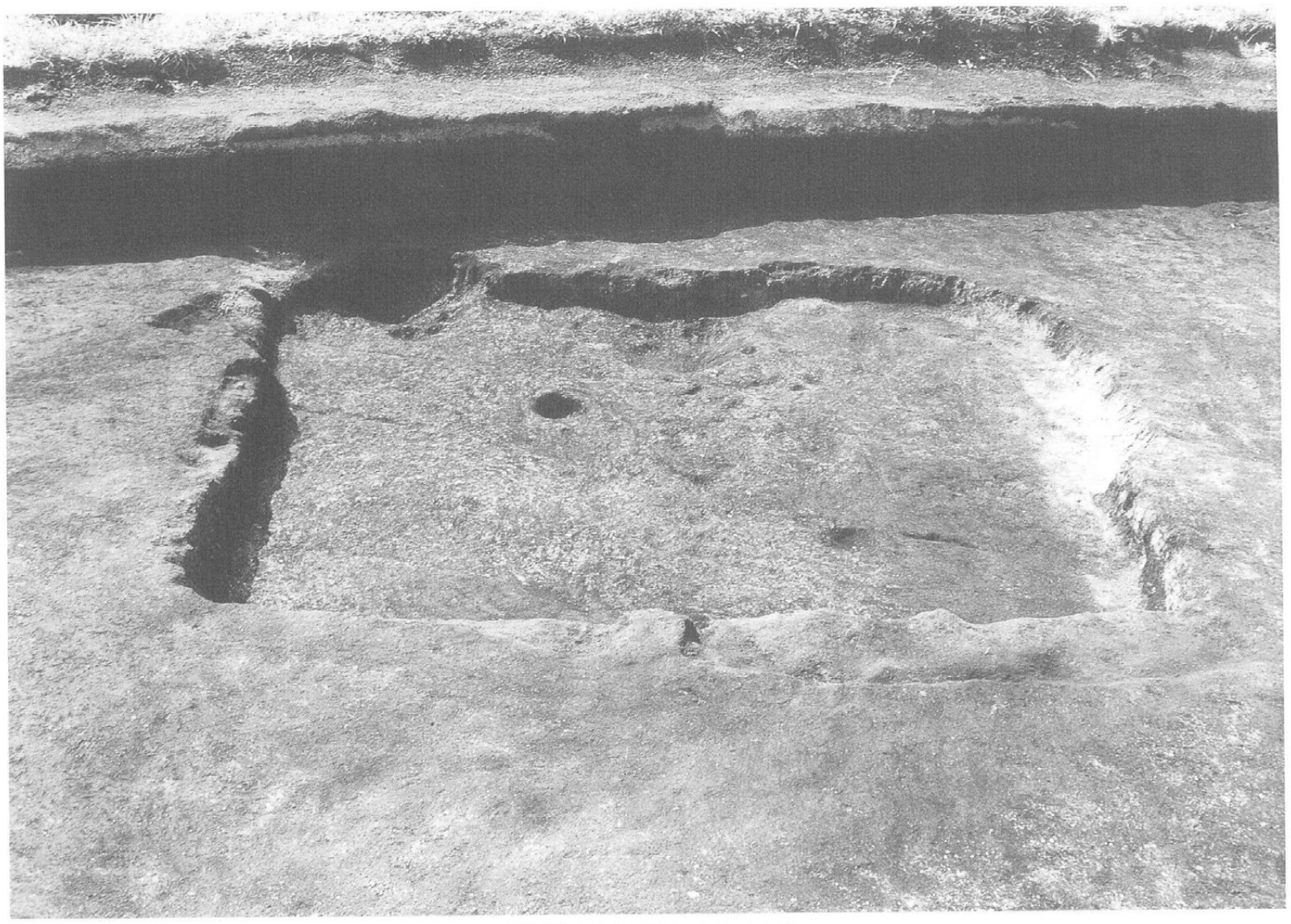
５号住居跡層序（東より）



６号住居跡全景（北より）

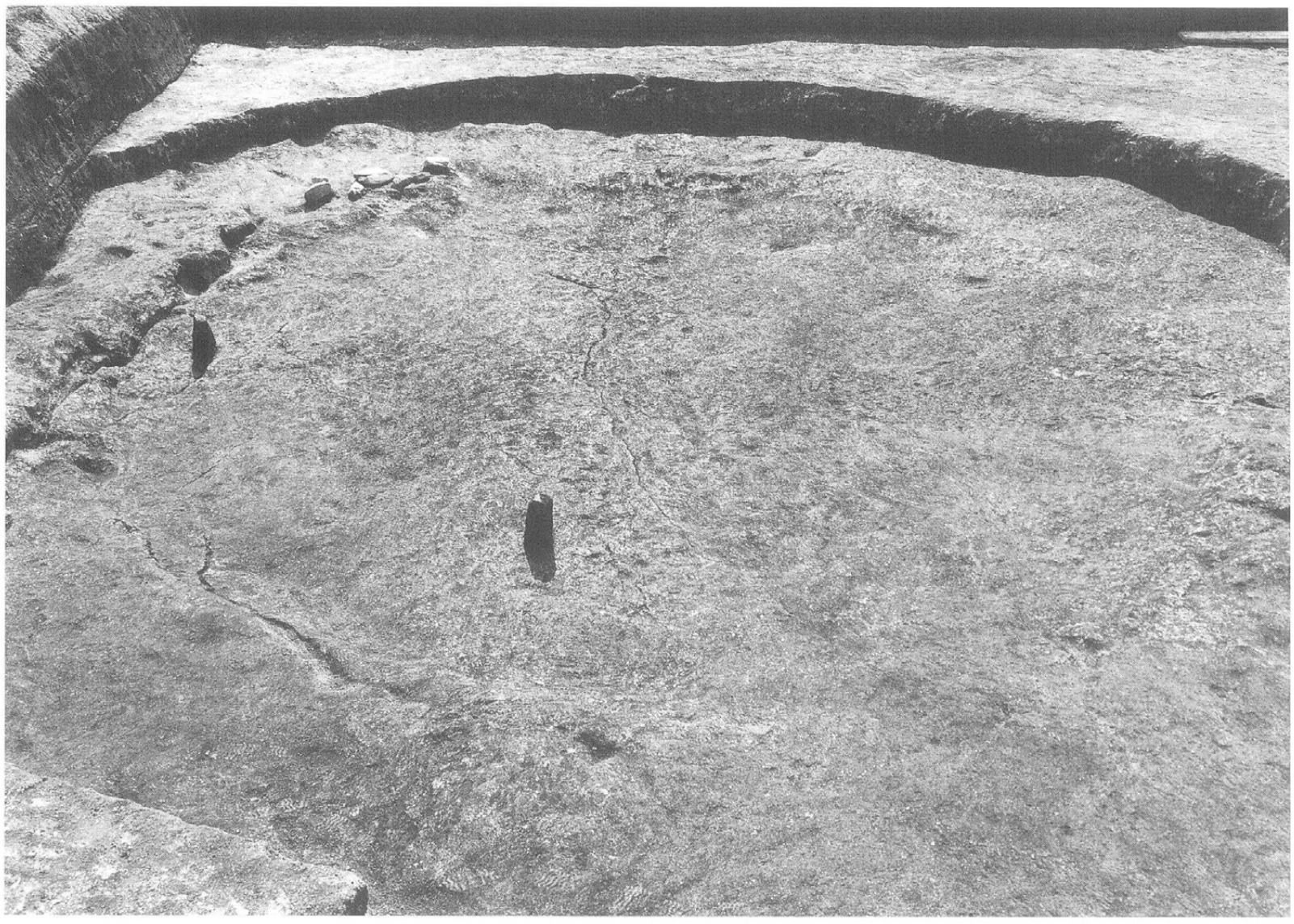


6号住居跡層序（北より）

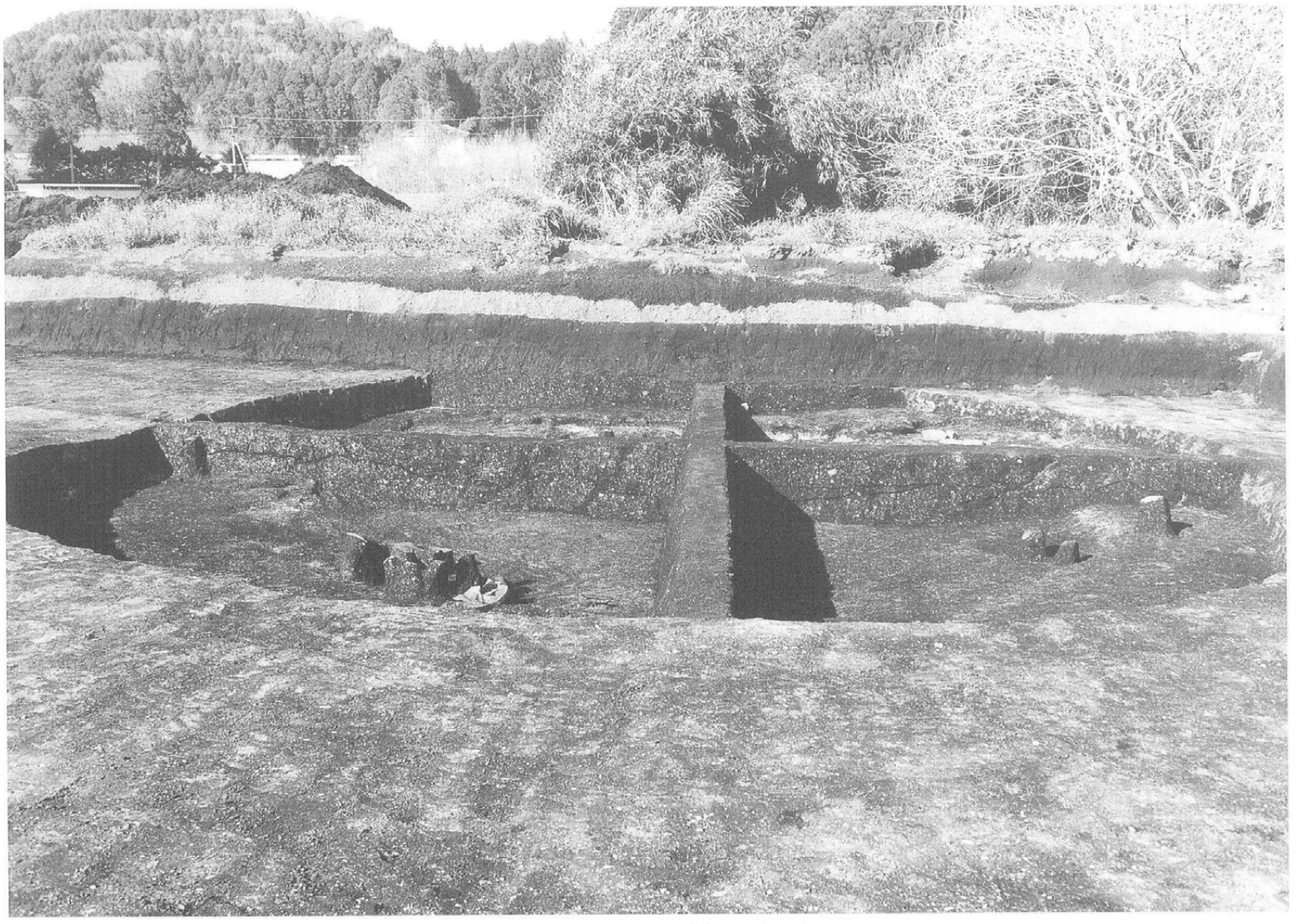


7号住居跡全景（北より）

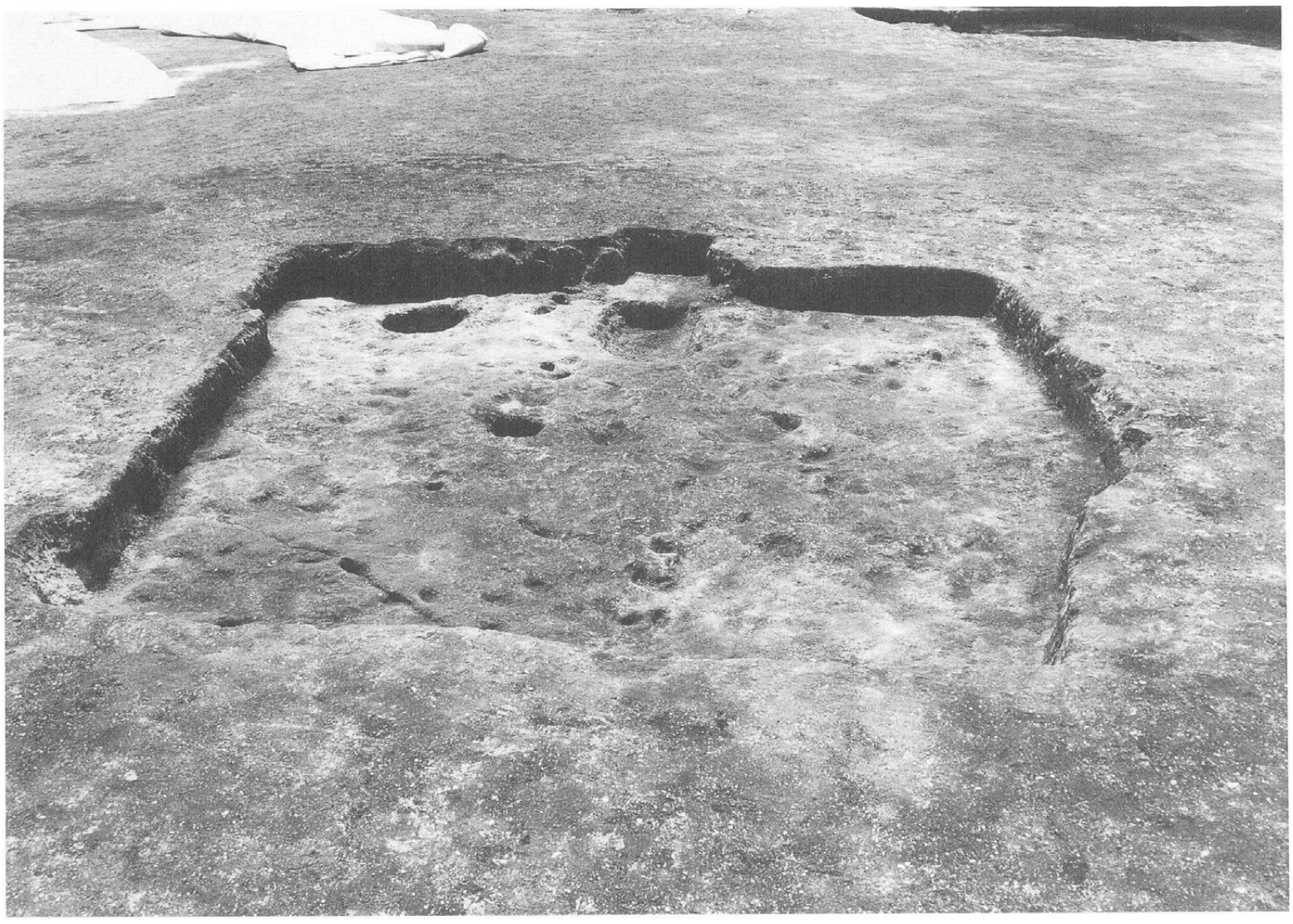
７号住居跡層序（南より）



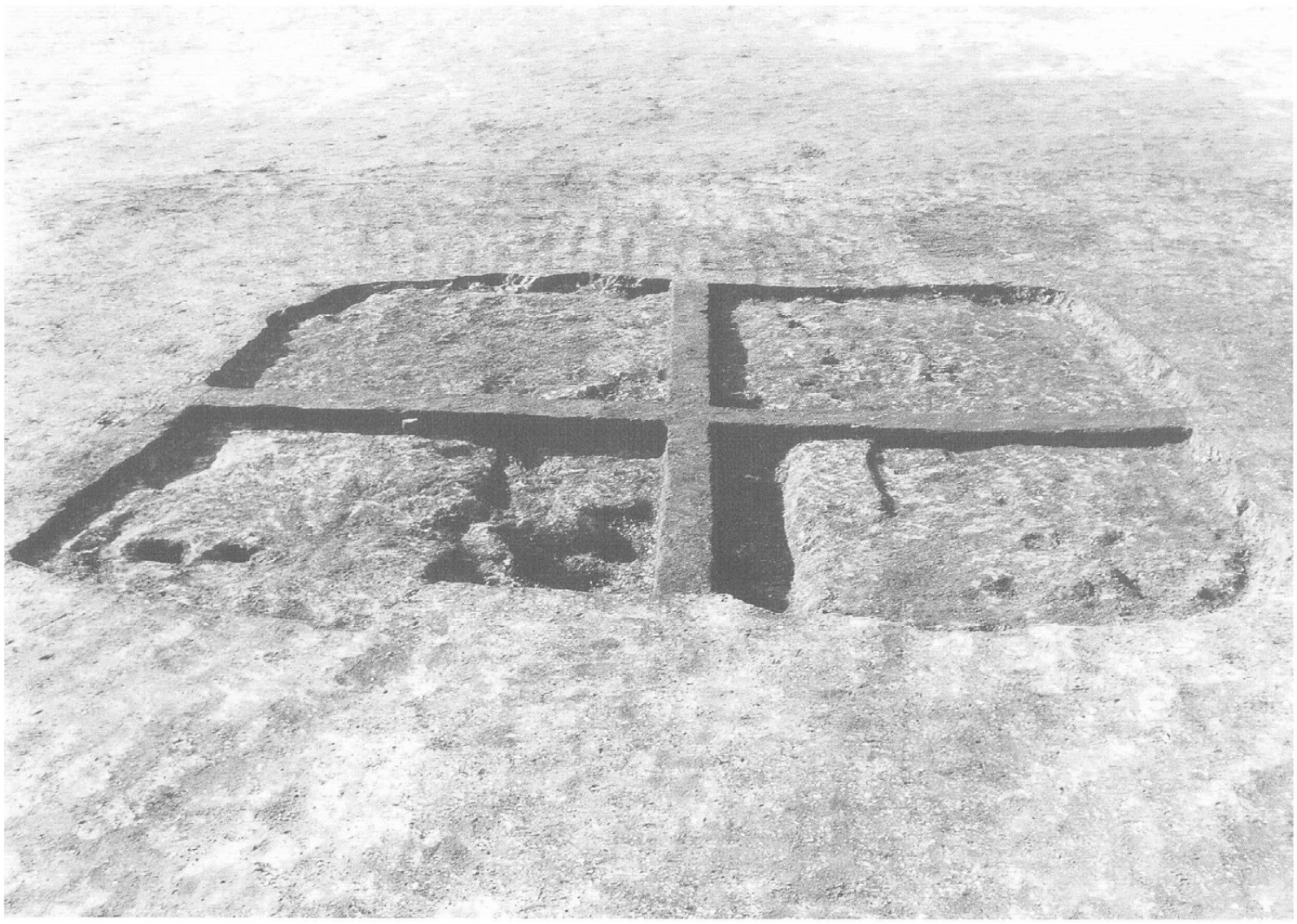
８号住居跡全景（南西より）



８号住居跡層序（南西より）



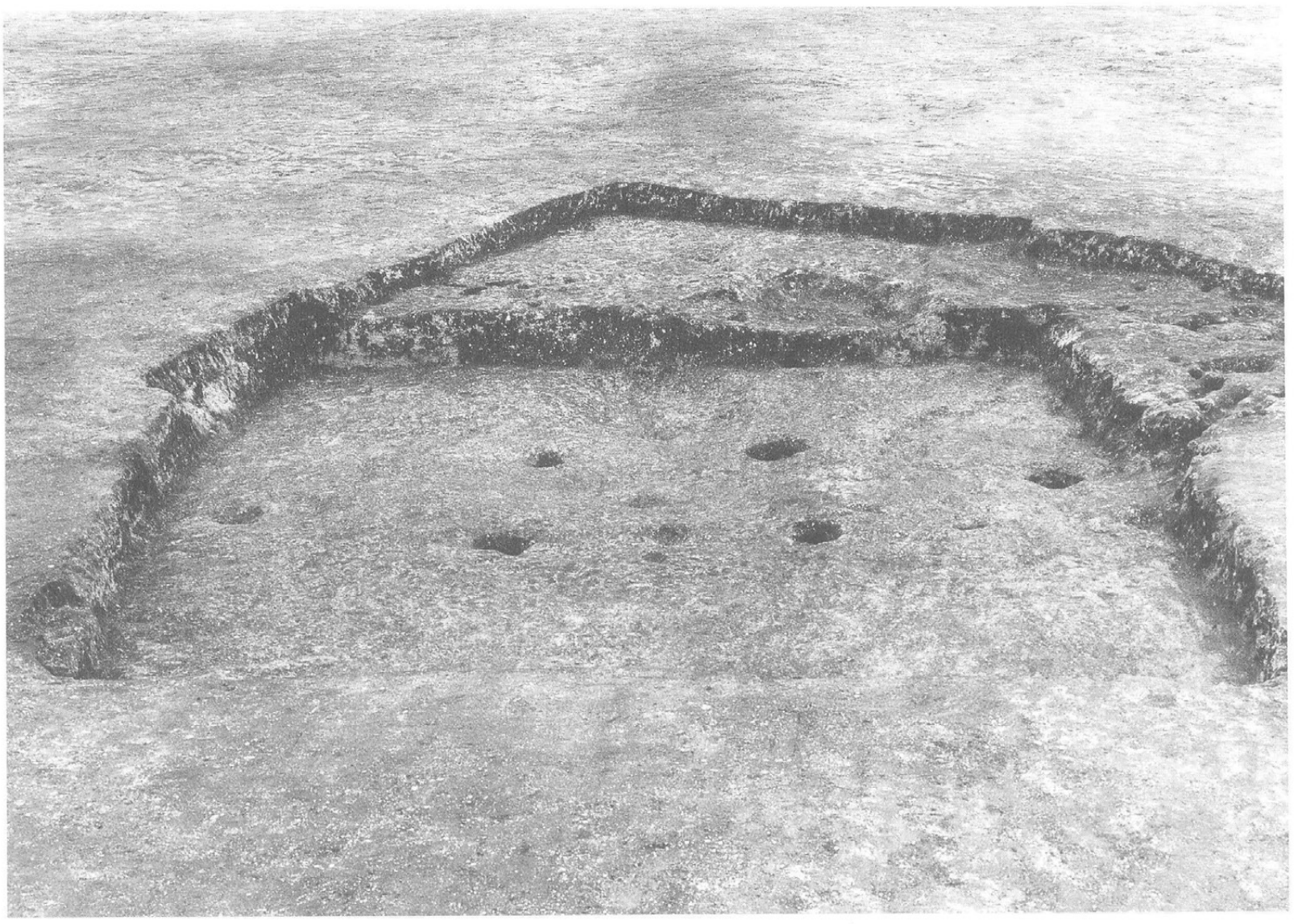
９号住居跡全景（北より）



10号住居跡全景・層序（南より）

11号住居跡全景（西より）

11号住居跡層序（西より）



12号・13号住居跡全景（北西より）

12号・13号住居跡層序（南西より）

調査報告書抄録

ふりがな	なべまえだい3いせき
書名	鍋前第3遺跡
副書名	県営中山間地域総合整備事業高崎地区に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第82集
執筆・編集担当者	山嵜　薫
発行機関	都城市教育委員会
所在地	〒885-8555　宮崎県都城市姫城町6街区21号
発行年月日	2007年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	調査期間	調査面積	調査面積
なべまえ 鍋前第3遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 たかざきちょう 高崎町 おおむた 大牟田		0　029	20041129 ～ 20050329	6,000㎡	県営中山間地域総合整備事業高崎地区事業

種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代終末 ～古墳時代初頭	竪穴住居跡　13基	甕・壺・高坏	ベッド状遺構や間仕切りを持つ竪穴住居

16-84

都城市文化財調査報告書　第82集

鍋前第３遺跡

２００７年３月

編集発行　宮崎県都城市教育委員会

〒885-8555　宮崎県都城市姫城町６街区21号

印　　刷　株式会社 宮崎南印刷

〒880-0911　宮崎県宮崎市大字田吉350-１